

ご挨拶

東京矯正歯科学会

会長 清水 典佳

今年は夏の猛暑から一転して、残暑を感じることなく涼しくすがすがしい毎日が続きました。最近では冷え込むこともしばしばで、秋の深まりを強く感じる今日この頃です。東京矯正歯科学会では恒例の秋季セミナーを迎えることとなりました。今回のテーマは「超高齢社会における矯正歯科の役割」というタイトルで開催することとしました。

長寿大国日本は2007年に65歳以上の高齢者が人口の21%を超え、超高齢社会に突入しました。今年9月15日の敬老の日で、100歳以上になる高齢者は5万4千人余りと過去最多を更新し、43年連続の増加となったそうで、これから急速に超高齢社会が加速すると報告されています。長寿の理由を「医療や介護の分野が進歩し、高齢になっても健康に暮らせる環境づくりが進んだため」と分析しており、高齢になっても食事を含めた日常生活活動（ADL）を営めれば、生活自立ができて幸せな生活を送ることができると考えられます。矯正治療も進歩し、高齢者の治療でも良好な結果を得やすくなった昨今、長寿理由の「医療分野の進歩」の中で矯正治療が、ADLにどのように影響し、患者のQOLにどのように貢献できるか、ということを考えてみようということになり、本セミナーを企画しました。超高齢社会が加速する今後は、ますます重要な課題になると考えられます。

3名の著名な先生に講師をお願いし、茂木悦子先生には8020達成者と咬合関係の検討から矯正治療が如何に重要かについて、宮澤健先生には超高齢社会を迎えた我々が高齢者の矯正治療をどのように考え進めていくべきかについて、松本圭司先生には矯正治療後の長期経過症例から見る治療目標の設定について、ご講演いただく予定です。臨床経験豊富な先生方が一堂に会して、新しい重要なテーマでご講演くださることになっており、有意義なセミナーになることを確信しております。多数の方々のご来聴をお待ちしておりますので、よろしく願いいたします。

日本矯正歯科学会認定医の方は、当日、IDカードをお持ち下さい。セミナー参加者は、研修ポイント5点が加算されます。



(有楽町マリオン11階) (Tel. 03-3284-0131)
(Fax. 03-3213-4386)

有楽町朝日ホール
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1
有楽町マリオン11階
TEL (03) 3284-0131

東京矯正歯科学会
東京都豊島区駒込1-43-9 (〒170-0003)
一般財団法人口腔保健協会内
TEL (03) 3947-8891
FAX (03) 3947-8341

平成26年

東京矯正歯科学会 秋季セミナー

超高齢社会における矯正歯科の役割

モデレーター：新井 一仁 学術委員長

講演者：茂木 悦子 先生

宮澤 健 先生

松本 圭司 先生

日時・平成26年11月20日 (木曜日)
午後6時より

場所・有楽町朝日ホール

当日会費・無料 (会員、会員同伴のコデンタルスタッフ)
¥3,000 (非会員)

茂木 悦子 先生

昭和50年3月 東京歯科大学卒業
 昭和55年3月 東京歯科大学大学院修了、歯学博士
 昭和56年4月 東京歯科大学助手
 平成9年7月 東京歯科大学講師
 平成14年5月 米国テキサス大学サンアントニオ校
 Visiting Research Professor
 平成16年10月 東京歯科大学助教授
 平成19年4月 東京歯科大学准教授
 平成25年10月 東京歯科大学病院教授(歯科矯正学講座)
 平成2年8月 日本矯正歯科学会認定医および指導医
 平成15年2月 臨床研修指導歯科医
 平成18年12月 日本矯正歯科学会専門医



8020運動へ矯正からも発信するために

成人に対する歯科啓蒙を活性化する目的で8020(ハチマルニイマル)運動が始まったのは25年前の1989年のことでした。開始当初、8020を達成している人は8%、80歳で平均4.5本の保有でしたが、今では38.3%、13.9本になりました(2011平成23年厚生省歯科疾患実態調査より)。これらの8020達成者は何でも良くかめて食生活が豊かであり、元気でQOLが高く、世界に先駆けて超高齢社会に突入している日本にとって、「加齢モデル」と言えるでしょう。

もちろん歯が多いことは重要な要素ですが、私たちが彼らに興味を持ったのはその良好な咬合関係でした。さらに驚いたことに、これまで300人以上の8020達成者の歯を観察しましたが、矯正治療の対象となる反対咬合や開咬の方はほとんど見当たりませんでした。咬合のレベルで力学的に不均衡が起こると、長い間には過重負担な部分が現れ、歯の崩壊に繋がると考えられます。

歯を失わないためには歯周病と齧蝕にならないことが重要と言われていますが、これに咬合に問題がないことを加える必要があると考えています。

昨年、花田らにより8020健康調査研究報告(8020推進財団)として、1997年からの追跡調査結果が発表されました。その中で歯を多数失うと咬合が崩壊し、このことが身体運動機能に関与すると述べています。

ようやくここへきて8020運動に咬合の問題が表面化してきました。

これからの高齢者は身体的に自立していることが求められます。正常な咬合を維持することが体全体の自立度に貢献すると考えると、さらにそれは医療費削減にも繋がるものと期待できます。

今回、8020達成者の歯、歯列、咬合の特徴、20代成人の歯列、咬合との比較、8020達成者のADL、QOLの高さ等これまで行った調査結果から、矯正治療へフィードバックできる項目を選び、8020運動へ矯正から発信できることやその留意点を述べたいと思います。

宮澤 健 先生

昭和63年 愛知学院大学歯学部卒業、歯科矯正学講座主任
 平成4年 愛知学院大学大学院歯学専攻入学(歯科矯正学)
 平成6年 カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校
 医学部整形外科 Bone Research Laboratory 留学
 平成8年 愛知学院大学大学院歯学専攻研究科卒業
 平成9年 愛知学院大学歯学部歯科矯正学講座助手
 平成13年 同 講師
 平成16年 同 助教授
 平成18年 同 准教授
 平成22年 愛知学院大学成人矯正歯科特殊診療科教授
 平成24年~平成25年 日本矯正歯科学会認定医委員会委員
 現在に至る
 公益社団法人日本矯正歯科学会認定医・専門医・指導医



超高齢化にむけて今何ができるのか？

人口に対して65歳の老年人口が21%以上を占めると超高齢社会と定義されているようです。本邦では2007年に21%を突破したので、すでに超高齢社会に突入しているといえます。また、2045年には38.2%を老年が占めると予想されており、ますます割合が高くなっていくようです。この少子超高齢社会で、われわれ矯正歯科医はどのように自らのアイデンティティを確立していくのか。しっかりと考えなくてはならない時代に入ってきているものと思います。

成人矯正患者の割合が多くなってきているのは確かですが、何歳まで矯正治療が行えるのか、また、最長何歳まで矯正治療をしたことがあるか、という競い合いはナンセンスであり、患者さんが人生の残りの時間を豊かに過ごすために、これから矯正治療で使う時間、労力、我慢と費用のプラスマイナスを計り、どれだけプラスが大きいかで矯正治療の可能性を探る必要性があります。矯正治療技術や器材の進歩によって、このプラスの伸びしろを高めていくことが必要です。

しかし、超高齢の方々に、その歳になってから矯正治療を勧めるのではなく、超高齢になる前に矯正治療を終え、その準備を整えて超高齢時代を豊かに過ごしていただくことが重要であると考えています。超高齢社会の中に入ってきたわれわれが今できること、やっておくべきことを考えてみたいと思います。

松本 圭司 先生

昭和31年 東京歯科大学卒業、歯学博士(昭和44年)
 康徳義塾大学医学部歯科口腔外科科学教室入室
 医療法人日本整美会入局、松本義経ならびに
 Dr.Wallace Bellに師事、エッジワズ法を研鑽
 昭和38年 米空軍三沢、米陸軍千歳基地へ矯正特殊顧問として出張診療(基地研修まで)
 昭和40年 Dr.Joseph Jarabak seminar受講 (San Francisco)
 昭和42年 医療法人日本整美会・整美会矯正歯科センター設立(新宿)
 昭和45年 東京歯科大学矯正学教室非常勤講師
 昭和48年 康徳義塾大学医学部非常勤講師(平成23年まで)
 昭和53年 Dr.Robert Ricketts seminar受講 (Pacific Palisades California)
 昭和62年 日本臨床矯正歯科医学会会長
 平成2年 第90回アメリカ矯正歯科学会大会(AAO)・講演(Washington D.C.)
 平成17年 第33回日本臨床矯正歯科医学会大会・アンコール学術演習賞受賞
 平成19年 第15回日本人矯正歯科学会大会
 平成22年 ビジュアル・ジョーナルアカデミー・国際歯科学会・日本部会長
 平成25年 第72回日本矯正歯科学会大会・学術大会優秀発表賞受賞
 平成25年 アメリカ矯正歯科学会(AAO)国際会員 Gold 50-year pin 受賞
 日本矯正歯科学会認定医・指導医、日本成人矯正歯科学会認定医・専門医・指導医



長期経過症例の Evidence から捉えた安定する治療目標

このたび、東京矯正歯科学会秋季セミナーにおいて、昨年の第72回日本矯正歯科学会大会で発表した「矯正治療後30年以上経過した開咬を伴った骨格性反対咬合の2症例」について、その検証結果などを中心とした講演のご依頼を戴いた。今回のテーマは「超高齢社会における矯正歯科の役割」である。2012年内閣府資料によると、65歳以上の高齢者人口が総人口の24.1%を超え、まさに超高齢社会へ突入した日本。心も体も健やかに齢を重ねる「サクセスフルエイジング」という言葉も耳にするが、人間にとって最も大切な生き残るための機能の一つであり、健康を維持していくためのより良い「咬合」を獲得するために矯正歯科の果たすべき真の役割は何か？

「歲月ひとを待たず」。誰でも平等に年を重ねて高齢となるが、これまで58年間の臨床の中で過去に自分が矯正治療を行っている、自然保定で長期経過した症例はどのような状態になっているのか。特に保定が難しく、後戻りしやすい skeletal class IIIなどは稀者、患者とともに心配なところである。

近代矯正学の父である Edward H. Angle は、1900年初頭にアングル矯正専門学校(The Angle College of Orthodontia)を設立。歯科矯正学の教科書“Occlusion”を発刊し多くの高弟を輩出した。また科学的で洗練された成長予測や診断・治療法で矯正歯科臨床に大きく貢献した Robert M. Ricketts は、良好な治療結果の1,000症例以上と正常咬合者のデータを分析した論文“The Keystone Triad (Am. J. Ortho. 1964)”にLI-APoの重要性、すなわちA点と Pogonion を結ぶA-Poラインを基準線として下顎前歯を適正に位置づけることが機能的、審美的にも調和が保たれ、咬合も安定していたと述べている。

そこで本セミナーでは、昨年発表した症例に上下顎前突症例など数症例を加え、CBCT画像による下顎前歯の位置と symphysis の形態変化ならびに長期経過症例から見えてきた治療目標など未来に繋がる evidence を共有し、矯正歯科の素晴らしさを皆様とともに考えてみたい。